

遊ぶ言葉：英語の笑いとユーモア感覚

小 泉 純 一

異文化を理解するさいもっとも難しいことのひとつはその国の言葉が持つ笑いの感覚を理解することではないだろうか。それを理解するには、言葉を理解するだけでは不十分で、その言葉が持つものの考え方や感じ方を身につけている必要があるからだ。それに加えて、言葉のイメージや手触りのようなニュアンスを感じ取る言語感覚も身に付けていることが望ましい。

歴史的に見て同一の文化圏にあったり、言葉同士の間につながりあれば、笑いの感覚や言語感覚には類似するものがあるだろうから、お互いを理解する方策も多い。一方、日本人が英語の笑いやユーモア感覚、言語感覚を理解する場合、まったく理解不能と言うわけではないにせよ、かなりの障壁がある。日本人が英語という異文化を理解するときどのような障壁があって、なぜ理解するのが難しいのかという点について、なぞなぞやジョークなどの言葉遊びを切り口にして明らかにすることにする。

まず英語のなぞなぞを三つ例にとって、日本人が英文を理解する際、内容の伝わりやすさには違いがあることを示しておきたい。

Little Nancy Etticoat,
With a white petticoat,
And a red nose;
She has no feet or hands,
The longer she stands
The shorter she grows.

What pet makes the loudest sound?

Why is a fish dealer never generous?

一番目にあげたものは英米の子どもたちが大昔から引き継いできたマザーグースの唄の一つ。¹⁾ 残りの二つは普通のなぞなぞ。答えは順番に「火の灯ったろうそく」、「トランペット」、「魚売り(=わがまま)だから」となる。

ろうそくのなぞなぞは脚韻を踏んだり、文のリズムを合わせていることから、マザーグースの典型とも言える。下着の「ペチコート」と韻を合わせるために「ナンシー・エチコート」という名前が作られている。このような下着を女性が着ていたのは十九世紀ころまでだが、この唄は十六世紀ころから歌われていたらしい。内容から見れば、白と赤の対比、時間がたてばたつほど短くなるという点では、このまま訳しても日本語のなぞなぞとして通用するだろう。

二つ目のなぞなぞは多少英語を知っていれば答えることができる。「もっとも大きな音をたてるペットってなに」の答えとして「トランペット」が成立するのは、愛玩用の「ペット」と楽器の「トランペット」の「ペット」という音が共通するからである。愛玩用のペットの中で鳴き声が一番大きなものはなにかと考える限り答えは出てこない。ペットの意味を離れて、音の点でペットと駄洒落を作る言葉を考えなくてはならない。言葉から意味を差し引いて、言葉の音に身を任せるには、言葉の日常的な意味の世界から抜け出さなくてはならない。

三つ目のなぞなぞ「魚屋はなぜ気が悪いのか」は、なぞなぞとしての難易度も高く、答えを聞いても腑に落ちにくいかもしれない。これもトランペットと同様駄洒落によるなぞなぞ。ヒントを出すと、魚屋と言う仕事は魚屋に何をさせるか、を考えればいい。このなぞなぞは日本語で考えている限り答えを出すことは不可能だ。ヒントに対して英語で考えてみる。

Because his business makes him sell fish.

この英文を眺めてなぜこれが答えなのか理解できなくても、この英文を何回か声に出して読んでみるとひらめくものがあるかもしれない。前に書いた通り、「魚を売る」ことは「わがまま」でもあるからだ。意味の上ではこの二つは何の関係も持たないが、音の点では類似した音になる。しかしこのように謎解きをして、使役動詞による文型や動詞と目的語の結びつき、そして「セルフ」の形容詞形などの働きを頭だけではなく体でも理解していなければ、この答えに納得することは難しいのではないだろうか。

英語を母国語とする子どもたちの言葉の世界には、このようななぞなぞが含まれている。言葉と触れ合う中で、子どもたちが自然にこのような言葉遊びと親しむのは洋の東西を問はない。言葉には意味を作り出す不思議な力があるからだ。しかし大人が使う言葉の中になぞなぞが使われることはめったにない。英語を話す子どもたちが親しんでいる言葉の世界は、英語を母国語としないものにとって氷山の水面下の部分に相当する。

上にある三つのなぞなぞの理解しやすさは、それぞれの内容によって異なってくる。ろうそくのなぞなぞは日本語のなぞなぞとしても成立するから、その点では日本人にも理解しやすいものだ。もっともろうそくになじみの薄い若者には面白みは少ないかもしれない。また、韻文独特の脚韻やリズムを読みこむことができれば、意味を越えたレベルでこの詩を楽しむこともできる。三つの中でもっとも日本人の学生が理解しやすく、納得できるものはトランペットのなぞなぞだろう。仕掛けが単純で、分かりやすい駄洒落だから、答えを聞いて意味のずれを知った瞬間に笑

うことができる。その点魚屋のなぞなどは奥は深いがある程度英語力がなければ面白くも何ともない。「セルフフィッシュ」が意味する二つの概念を押さえた上で、この音を発話したときにその両義性の幅に身を任せて、どっちつかずの状態を受け入れられなければこのなぞなぞを楽しむことはできないと私は考える。

これらの例からも明らかな通り、取り上げる素材の性格によって理解のしやすさには違いが生じる。外国語を母国語に翻訳できるかと言えば、それは不可能だと答ざるをえない。できる部分はもちろんあるが、できない部分もあるからだ。また完全にはできないにせよ、四割、六割ならできるという場合もある。少なくとも言葉同士が対一対で完全に対応できていると考えることはできない。異文化を理解する場合、自分の母国語に翻訳して理解するより、異文化に自らをさらして、そのまま理解する方が効率的である。しかし、いきなりそうすることは不可能であるから、翻訳可能な部分と翻訳不可能な部分があるかを見極めることは異文化を理解する上で効果的な手がかりになると思う。一つの言葉がどのようなイメージを持っているのか、人間が言葉に対してどのような感覚を持っているかなどの問題を、英語のユーモア感覚や言葉遊びの問題を素材とし、異文化理解のあり方を探る糸口とすることができる。

言葉について考えるとき、どれほどイメージの働きが重要であるかは肝に命じるべきである。ここでイメージと言っているのは言葉の意味と関係している。言葉は二つの側面からとらえることができる。一つは記号表現すなわち書いてある文字、これは恣意的なものである。もう一つは記号内容、つまり辞書に書いてあるような言葉の意味や定義である。イメージは後者と関係するが、それを理屈や言葉の上だけで理解するのではなく、母国語の場合と同じように生活感覚の中で体で把握し、言語化される以前のイメージとしてつかみとることを思い浮かべてほしい。たとえば、十なら十の部分を全部言葉で論理的に説明するのではなく、「こんな感じ」とか「そんな感じ」というふうに感覚的につかみとる方法である。

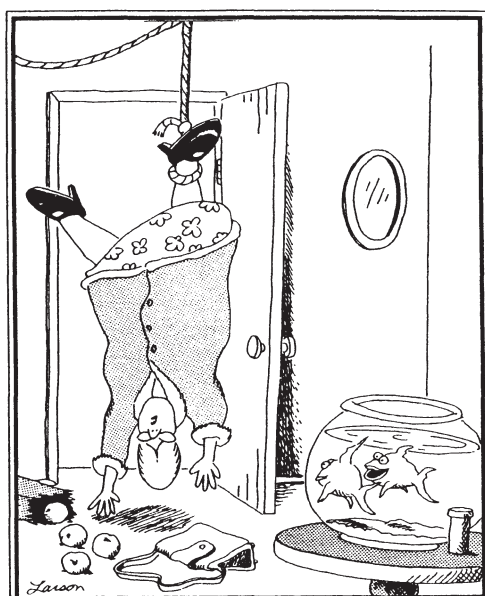
一緒に使われる語や文脈が異なると、言葉の意味は微妙に変化してしまう。一足す一が二ではなく、一のままであったり、三とか四に変わってしまう場合もある。その意味で言葉は単純な道具とは異なっている。

We must all hang together, or assuredly we shall all hang separately.

これはベンジャミン・フランクリンが行った演説の中の一節だが、言葉遊びを意識した言い方を工夫している。“hang”が二回使われ動詞句の部分と同じ構造になっているが、一緒に使われている副詞の違いによって「力をあわせて団結する」と「ばらばらに首をくくられる」となり意味に違いが出てくる。日本語に翻訳してしまうとそのニュアンスの違いは分かりにくくなるが、該当する部分を英語で発話した際に頭の中に作られるイメージは対立的な性格を持つ。しかも同じ言葉が使われていることもあり、その全体的なイメージの違いは際立ってくる。一緒に使われる副詞の意味が異なるために、“hang”という動詞の働き方が根本的に異なっている。その結果、

一つの目的に向かって人々が力を結集させようとするイメージとそれが失敗して散々になり殺されるイメージが、見かけの上では並列させられている。同じ言葉であっても使われる文脈が異なれば、言葉自体のイメージも微妙に変化する。

子ども向けの本には挿絵が使われていることは珍しくないが、大人になるにつれて挿絵のある本は少なくなる。挿絵は文章で書いてある内容の理解を助けてくれる。幼児を対象にしたアルファベットを教える絵本であれば、たとえば一頁目にはアップルパイの絵が描いてあり、その綴りも書かれている。つまり、言葉と物、あるいは一つの情景は対応関係にある。抽象名詞のように目に見えない概念を示す場合は簡単ではないが、物の名前などの場合言葉で説明するより実物を見せるほうが理解しやすい。下の二つの一コマ漫画を参考に見てもらいたい。²⁾



動詞の用法がどちらかと言えば特殊なものなので、仮に英文だけがあっても状況を示す漫画や説明がなければ、それぞれの趣旨を理解することは不可能である。漫画の代わりに状況が英文で説明されていたとしても、英語が苦手な人は内容を把握しにくいのではないだろうか。英語を形だけ直訳できても趣旨を理解することはできない。この漫画の面白さがわかるかどうかは使われている動詞をイメージとして把握できるかどうかにかかっているというべきだろう。

これらの漫画の作者の Gary Larson ゲーリー・ラーソン (1950-) は、どこか無気味な雰囲気をもたせようとするブラックな笑いを売り物にしている。まず、どこにおかしさがあるのかを考えてみよう。二つの動詞のこの文脈での定義を英英辞典から抜粋しておきたい。

mean, to have in mind as or for a purpose

work, to be active in the proper way, without failing³⁾

前者は「冗談ではなく本気だ」を意味し、“I mean it.”というフレーズでもよく使われる。後者は「きちんと作動している」というものである。それさえ了解していれば漫画の意図しているものは明らかになる。オーストラリア生まれのカンガルーは、ブーメランで狙われたのは自分に違いないことがわかっているから、「ねらわれたのは自分だ」とつぶやいている。都会の街角にカンガルーがいること自体ナンセンスであるし、ねらいが外れて人間が倒されたのを見て、冷静に状況を分析しているカンガルーの様子がとぼけたおかしさをかもし出している。もう一つの漫画では、ドアをあけて部屋に入ろうとした中年の女性が縄に足をとられて、逆さづりになっている。金魚は、いたずらが上手く行ったので「やった、上手くいった」と喜んでいる。古典的とも言えるいたずらを金魚鉢の中にいる金魚が人間に仕掛け、喜怒哀楽を示さないはずの金魚が大喜びし、われわれが金魚に対して持っている普通のイメージが打ち崩される。しかも、人間のいたずら小僧と同じ反応を金魚がしている点で、瞬発力のあるおかしさを誘発している。

言葉のイメージを捉えるためには、辞書に載っている言葉に頼りきってはいはだめである。言葉の持つニュアンスなどを、こんな感じというふうに、イメージとして感じ取る必要がある。上で述べた例を使えば、漫画を見て得られる情報を活用しその情景が置かれている文脈の状況を推察し、その上で英文がどのような意味であるのかを逆に創造しなくてはならない。「それはわたしに対して意味されていた」と直訳できたとしても、この文章が具体的に何を言っているのかを理解しなくてはならないし、その上で日本語として文脈にあった自然な表現を作りださなくてはならない。たとえば、「だれかがブーメランを私にぶつけようとしていた」であったり、先に述べたように「狙われたのは自分だ」などのように、漫画というイメージがない場合も同様である。英文で描かれている情景をイメージして文脈の状況をまず理解した上で、個別の文章の意味を考えればいいのだ。だからこそ小説や詩などの文学に限らず文章を読む場合、作者の意図を理解するためだけでなく、個々の文脈を読み取るためにも、想像力が要求される。想像することは、イメージを創造することに結びつく。さらに書き手が感じていること、気持ちを理解するにも、文章から読者は自分でイメージを作らなくてはならない。

話しは少々脱線するが、言葉とイメージの関係についてもう少し述べておきたい。イメージとは何かと言語化される手前の心理のプロセスで働いている。それは記憶や欲望、感動などからつむぎだされるものなのかもしれない。寺山修司(1936-83)はその関係について次のように語ったことがある。

本当の詩人というのは「幻を見る人」ではなく「幻を作る人」である。私がイメージということばではなく記号ということばを使ったのは、イメージがまだゼリー状の形になる前の心象であるのにくらべて、記号はそれを「とらえた」という証だからなのだ。⁴⁾

寺山はここで言葉の問題について、ゼリー状の心象が存在し、それに一定の形を与えるのが記号であるというプロセスを明確にしている。物が先か言葉が先かという問題の起源をたどればプラトンとアリストテレスの時代にまでさかのぼることができる。人間が何時頃から言葉を使い始めたのかも正確に特定されていないが、先に物が存在して、その後それらを意味する言葉が生まれたと考えていいだろう。あるいは逆に、様々な感情があって、それを表現する言葉が生まれてきた場合もある。「初めに言葉ありき」の言葉とは概念や定義であって、名づけられる以前の事物はそれ以前から存在したろうし、言葉を持つ以前の人間はそうした事物を見てイメージを精神に蓄積していたはずである。つまり言葉を駆使するには、イメージの働きを活性化し、想像力を働かせる精神活動が必要不可欠であったと思う。

文章を読む上で想像力が果たす役割は大きく、それがなければ読者はイメージを作ることができない。言葉を読む際どのようなことが読者の頭の中で起きるのか、それはどのようなプロセスを辿るのか、そこでイメージがどのような働きをするのかに関して、福沢諭吉（1835-1901）が紹介した英語の小話を例として取り上げて考えたい。

福沢は明治二十五年に『英和対訳：開口笑話』という本を出している。まず福沢の序と緒言があり、その後には三百四十篇ほどの笑い話が載せられている。笑い話が英語で書かれその後に福沢の対訳が添えられている。これらの笑い話はアメリカの新聞や書籍から福沢が入手し、日本の新聞で紹介したものだった。福沢の仕事の中ではあまり注目を受けてきていないらしいが、飯沢匡（1909-94）が着目し、まえがきと現代語訳したものを書き加え、出版しなおしている。⁵⁾ この著書を紹介しなおそうとした理由について飯沢は次のように説明している。

さてジョークと現下の日本人との関係を考えてみると、福沢が今から九十四年前に、早くも日本人のホモ・マジメデンス（これは私の発明した言葉で、ホイジンガの言ったホモ・ルーデンス＜遊びの心を持った人間＞のラテン語をもじってつくったものである）を戒めて、この『開口笑話』を刊行してくれたのに、今もって日本人はジョークを楽しむところまでに到っていないようである。⁶⁾

日本人の中にもジョークを楽しむ人はいるし、落語という芸能もあったわけだから、日本人がみなホモ・マジメデンスであると言いきることはできない。また所謂「お笑い」の芸も盛んではあるが、笑いの質にも幅があることが指摘されている。「笑い」が置かれている社会的状況とその質を明確にする必要があるが、日本では公的な場においておかしさを回避する傾向がある。そのような日本人の精神のありかたに福沢は風穴をあけようとし、飯沢はそれに共感を寄せている。

福沢がなぜこの著書を発表したかについては、上で述べた以外の理由もあった。飯沢はもう一つの理由として福沢の脱亜入欧の意識をあげている。西欧人の考え方や文化を身につけるには、英語の笑い話やその背後にあるユーモアの精神、言語感覚を学び取らなくてはならないからだ。そういう意味では、啓蒙的な見地に福沢は立っている。序で福沢は次のように述べている。

教育の目的は唯才徳の発達を促すに外ふらざれども其方法は千差万別際限ある可らず就中奇言を放て人の好奇心に投じ一笑の間に無限の意を寓して自ら人情世態の裡面を会心せしむるが如きは教育法の捷徑にして却って有力ふるものあるが如し⁷⁾

人間を理解するための一つの方法として奇言、すなわち笑い話が近道となることが述べられている。しかしそれだけではなく対訳であることから考えて、福沢は英語学習の一つの方法として笑い話を使おうとしたのではないだろうか。幕末から明治時代にかけて英語学習にはさまざまな試みがなされている。漢文のように返り点をつけて英文を読もうとしたものもあった。書き言葉に頼らず、耳で英語を聞きとって「ゴボーノシッポ」(=go board on a ship) などのような覚え方をしようとしたものもあった。福沢は西欧の思想について積極的に紹介を行う一方で、英語を使う人間がどのようなユーモアのセンスを備えているかを英文を通して理解する必要もあると考えたのだろう。

福沢がこの著書で紹介している笑い話には一つの傾向がある。それは日本語に翻訳して読んでも理解できることである。先に引用したなぞなぞで示したように、言葉遊びの中には他の国の言葉に翻訳できないものがある。笑い話でも同様だが、福沢はそのようなタイプのものを取り上げていない。目立った傾向としては、論理に矛盾があるもの、人間の本音を示唆するもの、数は少ないが格言などがある。

論理に矛盾があるものからは二つほど取り上げてみる。一つ目は昔のことをよく知っているお祖父さんを孫がどのようにとらえているか、その論理の矛盾を示したものの。

Tommy — Grandpa, do you remember Daniel Webster?
Grandpa — Oh, yes, my child, I remember him very distinctly.
A pause
Grandpa, you are a good deal older than I am, ain't you?
Yes, indeed.
How much older must I grow to remember George Washington?

富吉 お祖父さんは大岡越前守を見覚えて居るか子
祖父 覚えて居るともよく見覚えて居るよ
暫く言葉とぎれて
お祖父さんは私よりも餘程年が上だ子
ウン上だよ
私が何程年を取たら徳川家康を覚えて居られる様になるだろふ子——⁸⁾

福沢の翻訳では、トミーを富吉としているように、英語の音に合わせた名前を創造している。またダニエル・ウェブスター (1782-1852) とジョージ・ワシントン (1732-1799) は日本人が分かりやすいように日本人に置き換えている。翻訳する上でもう一つ配慮しているのは、自然な話し言葉にしていることだ。この笑い話のパンチラインは最後の一行である。そこまでは孫とお祖父

さんの自然な会話だが、最後の一行で孫の考えていることが突然明らかになる。つまりお祖父さんのように年を取れば過去の偉人と知り合いになれると孫は考え、自分も年を取ってそうなりたいと期待している。常識で考えれば不可能なことであっても、孫なりの前提と推論に基づけば、そのような結論が導かれることは理解できる。これを頭から否定するのではなく、前提が間違っていたにせよ、筋道の立て方を多として、孫の理屈をそのまま受け入れてやれるかどうかで、この笑い話の評価は分かれるだろう。人はこのような誤った推論を犯しがちであり、自分をこの孫に同一化し、自分もそのような誤りを犯したことがあると感じる人は、この笑い話のユーモアを感じ取れると思う。この笑い話は、孫がそうたずねた理由を考えなくてはならないので、考え落ちに分類できる。

次に挙げるものも論理に矛盾がある。さらにナンセンスの味付けがほどこされている。

HOW HE WOULD STOP HIM.

Pat (who is being lowered into a well) — Stop, will ye, Murphy? Oi want to coom up again.

Murphy (still letting him down) — Phat for?

Pat — Oi'll show ye. Af ye don't sthoph lettin' me doon, Oi'll cut ther rope!

如何にして之を差し止むるや

八 (井戸がへの為め井戸の中へつるし下ろされつゝ) オイ熊公下ろすのは止めな我や上がりたから
熊 (尚ほかまわずに下ろしつゝ) 何で上がりたんだ

八 畜生め見て居る下ろすのを止めないと此繩を切て仕まうぞ⁹⁾

英文では移民の話す英語のなまりを表現するため、発音に近いアルファベットの表記を行っている。福沢はお国訛りの強い移民の会話を落語に見られるような江戸っ子の雰囲気に移し変えている。新しくやってきた移民をジョークの的にするのはアメリカのジョークの常套手段なので、おかしい発音をさせることで新入移民へのからかいの気持ちを読み取ることができる。それがあからこそ最後の言葉のおかしさが増幅される。上にいる者が言うならともかく、下にいる者がそう脅しても、ナンセンスでしかないからだ。もっともそこに面白さはあるわけだが。

福沢には「天は人の上に人を作らず、人の下に人を作らず」などという名言があるように、明治時代の民主主義を体現した偉人である。そのような福沢が人間をどのような存在としてとらえていたかについて、次のような笑い話はヒントを与えてくれると思う。

STRENGTHENING THE MEMORY.

A. — My memory is getting weaker and weaker and weaker every day.

B. — I can give you a remedy.

What is it?

Lend me fifty dollars.

記憶をよくする法

此身も段々とする年で次第に記憶のわるくなるのには困るよ
隠居さん夫れは直になほる法がありあす
如何云う法だエ
私に五十円貸して御覧なさい¹⁰⁰

この笑い話は落語に出てくる長屋のご隠居さんの世界にイメージを移しかえられている。英文の「五十ドル貸してみな」には、直接的な響きがあるが、それを日本語にした方にはほのぼののとしてとぼけた感じが出ている。貸したお金を忘れる人は少ないから、ボケ防止にはよい方法かもしれない。もっとも借りた方はそうではないが、この小話の場合も、お金を貸すとどうなるかは直接には書いていないから、読み手はぼけつつある老人がお金を貸したらどうということになるかを考えて、イメージをおぎなわなくてはならない。

英語は日本語と比べて、一から十まで説明を求める言葉だが、それでもそれとなく暗示するにとどめるアンダーステートメントという表現方法がある。直接書かれていない部分について、その意味を読者が読み取らなくてはならない。

Litewayte: It's very disagreeable, don't you know, to associate one's inferiors.

Bronson: How in the world did you find that out?

甲 あなたは御存じありませんか、自分より劣った人と交るのは甚だ不愉快なもので御在ます

乙 あなたはマア如何して其ことを御發明なされましたか¹⁰¹

字面だけ読んでいても内容が把握できない典型的な例である。ブロンソン氏はライトウエイト氏に痛烈な皮肉を投げつけている。ブロンソン氏の前提では、ライトウエイト氏こそ彼の言う劣った人間に属していて、彼より劣った者は存在しないという前提をたててこそ、「どうしてそのことがわかったのか」という皮肉がきいてくる。そこを了解していなければ、この小話の面白さを感じ取ることはできない。つまり直接には書いていないことを想像して読み取れるかどうかが鍵になるのだが、この場合は英語でも日本語でも同様である。

福沢は笑い話以外にも格言的なもの、警句的なものを紹介している。このタイプのものは笑いを引き起こす以前に、人間や人間が作り出した文化の実際の姿がどのようなものかを示している。

“Where there is political Liberty, there can be no Equality. Liberty is the parent of inequalities in fortune.” — Sir Henry S. Maine.

政治の自由ある処に平等ある可らず自由は財産不平等の親なり¹⁰²

ヘンリー・S・メイン卿（1822-88）は自由主義、自由な競争のもとでは、その人の運や努力によって結果に違いが生じるから、貧富の差が生じるのは必然であると考えている。この警句は受

け取る側の考え方によっていくつかの反応に分かれるだろう。自由主義を絶対的に肯定する人たちには自分たちを批判する論証になる。自由主義者の言うことを多少なりとも批判的に聞いてきた人たちにとっては、自由主義の背後に隠された現実を示す論拠になる。この著書が発表されたのは明治の初頭であったから、急速に流入してくる西欧からの概念を無批判に受け入れることに対する警鐘の意味がこめられていたのではないだろうか。物事を相対的に見ようとするゆとりのある人なら、この警句に微笑むこともできるだろう。

今まで見てきたように福沢が取り上げている笑い話は日本語に翻訳しても通じるものであった。つまり、言葉の用法や使われかたではなく、話しの内容や理屈が理解できれば、笑うことができるものだ。そのようなタイプの小話を福沢が選りすぐったのだと予想できる。しかしその中にも、わずかではあるが英語の言葉遣いの面白さに着目できるものがある。

PRETTY MUCH THE SAME THING.

A. — I hear that you are going to marry a widow with \$ 10,000.

B. — You have got things mixed. I am going to marry \$ 10,000 with a widow.

殆ど同じことなり

甲 僕が聞いたには君は一万円持て居る後家と婚礼すると云ふことだ子

乙 夫れは話しが違て居ら僕は後家を持て居る一万円と婚礼するのサ¹³⁾

内容に付いては説明するまでもないと思うが、「持参金付きの再婚女性」と「再婚女性付きの持参金」という部分がパンチラインである。福沢はほとんど同じことなりと書いているが、イメージの働きはかなり違っている。言葉を入れかえるだけでイメージががらっと変わってしまうし、示唆される内容が大きく変わってしまう。結婚相手がたまたま金を持っていたか、金目当てに結婚したかでは、その差は歴然としている。言葉のもつ力や面白さ、不思議さがこのような言葉遊びから生まれている。笑い話というだけでも言葉遊びの範疇に入るが、語句に対するこだわりが生じると、言葉遊びの度合いは高くなっていく。

福沢の『開口笑話』が出されて約百年が過ぎている。今の時点でそこに収められた小話を読んでもみると、書かれている内容には当然昔の風物が反映している。しかし笑いのセンスと言う点では古びた感じはしない。当時の読者がどのようにこの笑い話集を受け入れたのかを示す資料はないが、一部の読者を除けば反響はそれほど大きくはなかったのではないだろうか。実は慶応大学の図書館にもこの著作は収蔵されておらず、同大の関係者はこれを重要視してこなかったフシがあると飯沢は述べている。

ただ福沢の歿後、ユーモアの精神は速く減退した形跡がある。現に小泉信三の如き後継者は、福沢の伝記を書き、そのなかではっきり、「今日から顧みて不必要と思われるほど嘲笑の言を吐いた」と書いている。私には不必要どころか、そこそ福沢の真骨頂で、福沢から「嘲笑」を抜き取っては形無しと思うのである。これは小泉という人にユーモアの心がなく、いつとはなしに福沢の最も嫌った儒教に立ち

帰っていたのではないかと危ぶまれる。以上の理由で「危言を放って」人を驚かした福沢の心は、この書中に脈々と生きている。¹⁴⁾

ここには日本人が笑いとどのように関わりを持ってきたかという問題が集約されている。特に明治時代には、庶民と知識人とは笑いに対する態度に違いがあったのではないだろうか。日本人には、天の岩戸の時代から寅さんの時代へと引き継がれている土俗的ともいべき笑いの感覚がある。一方脱亜入欧を目指した明治の知識人たちは、実利がえられる欧米からの技術や生産方法に関心を向けたが、ユーモアになど目を向ける余裕は無かった。その上、和魂洋才が示すように、技術は西欧に学んでも魂は大和魂があったからだ。大和魂といっても、日本人の精神は儒教に依拠するものである。技術だけ西欧から取り入れればよいと考える風潮に対して、西欧の文化を理解するには欧米のユーモアの精神を理解する必要があると考えたところに福沢らしさを認めるべきだろう。しかし第二次世界大戦に負けるまで、儒教的考えが知識人に及ぼす影響力は強く、ユーモアの精神が表舞台に登場することはなかった。そのような日本人の精神構造は簡単に変わるものではない。プライベートな空間で笑うことができても、公的な場で笑ってはいけないと刷り込まれ、笑う術を学んでいなければ、民主主義における平等な市民感覚は育たないのではないだろうか。その点では、福沢がどのような層を想定していたのか、だれを笑わそうとしていたのかについて興味は尽きない。

ここまで笑いかユーモアという言葉を使ってきたが、それらの意味についてまとめておきたい。日本語に昔からあるおかしさを示す言葉をあげてみると、滑稽、諧謔、頓知などがある。ユーモア、ウィット（機知）など西欧の国々で生まれた概念は、明治以降に取り入れられたものだろう。ユーモアは本来イギリス独特の笑いを示していた。ウィットはフランスに由来し、知的でしゃれた笑いが特徴である。笑いの質や性格は国によって違いがある。たとえばマザーグースには次のような唄がある。

There was an old woman
Lived under a hill,
And if she's not gone
She lives there still.¹⁵⁾

二行目と四行目が脚韻を踏み、言葉の選択に制限が与えられている。しかし、そのためにこのような内容の唄になってしまったわけではない。丘のふもとにすんでいる老婆がどこにもいっていないならばまだそこに住んでいるだろうという当たり前のことが述べられているだけだから、「だから何なんだ」と文句をつけたくなるほどだ。特に十七世紀から十八世紀にかけて、このようなタイプの唄の人气が高かったらしい。イギリス人のユーモア感覚の一つの特徴を示すと考えていだろう。同じタイプの唄には次のようなものもある。

Three wise men of Gotham,
They went to a sea in a bowl,
If the bowl had been stronger
My song had been longer¹⁶⁾

この歌については蘊蓄や歴史を語ることもできる。しかし、話の筋は単純なものだ。ゴッサムという町に住む三賢人が桶にのって海に出て、桶が丈夫だったら話はもっと長くなったのというものだ。何か特別なことが歌われるのかと期待していると肩すかしを食らわされてしまう。三賢人は結局溺れてしまったのだろうが、そこにこの歌のポイントはない。桶が丈夫でなかったから、それ以上歌うことはできないことがテーマとなっている。それならいっそ歌わなければいいのと思うのだが、とぼけたところにこの唄の価値がある。当たり前のことを当たり前でないように述べるにおかしさや、面白さを感じられるようにならなければ、イギリス人のユーモア感覚を理解することはできない。

イギリス人のユーモア感覚は独特なものなので、これについて説明をしている文献は少なくない。イギリス人とユーモアとの関係は、日本人にとっての幽玄や、わび、さびの関係と類似している。あまりにもその文化独自のものなので、その民族にとっては自明のものであったから、ことさら説明の必要を感じさせなかった。時代が変化して共同体の共通認識に失われた部分が生じると、文化の後継者たちに、失われつつあるものを教えなくてはならないと考える人たちが出てくる。*English Humor*『英国のユーモア』の著者 J. B. Priestley プリーストリー (1894-1984) はその一人である。

プリーストリーによれば、ユーモアはいくつかの要素の混合物から生まれる。その混合物とは、アイロニーを感じ取る力、ばからしき（不条理）を感じ取る力、ある程度の現実との接触、そして愛情である。このなかで愛情が欠如し、不寛容が支配する風潮が生じていることをプリーストリーは序文で嘆いている。この四つの要素一つ一つについてプリーストリーは説明を行っている。そして最後に説明している「愛情」こそがイギリス人のユーモアの鍵となる。

さて、愛情が吹き込んでくれるこの暖かみがなくとも非常に効果的なユーモアは成り立ちうるのであって、私はそのような最近の例を幾つか思い浮かべることができる。しかしながら、やはりそこには本来ならば存在すべき何か欠けているのであり、最良のユーモアの中には、その何か必ず存在しているものなのだ。対象を突き放して冷笑することを単にそれだけのために楽しむのだとすれば、それは、書き手および彼を喜んで読む読者双方の中に、ごう慢な弱さとも言うべきものが存在していることを示す。そんな連中はみんな、人生と折り合いがつけられないでいるのだ。¹⁷⁾

ユーモアには「愛情」が込められた最良のユーモアと、そうではないものがある。笑いの対象を選び出し、それを自分より劣ったものとして一方的に笑うのでは最良のユーモアにはならない。その状況や対象に愛情を持っていないとてならない。ウィットやジョークの笑いの場合、それは問はれることはない。笑いの的を追い込むところにそのエッセンスがある。その場合、相手を見

下して差別しようとするのは、ごう慢な弱さがその人間の中にあるからだ。さて、このような最良のユーモアの特性について考えてみると、この問題は自分のことを笑えるかどうかと関係しているのではないだろうか。松本安弘氏はユーモアとは「自分を現実の状況の外に置いて、自分で自分を笑い草にできる客観性である」¹⁸⁾と定義している。

自分を笑える態度は、自分を相手より優位な立場に置くと言う発想とは異質なものだ。たとえば、第二次世界大戦が始まったころシンガポールに駐屯していたイギリスの軍隊が日本軍の攻撃を受けていたことについての次のような笑い話がある。あるイギリス人が「イギリスの兵隊一人は日本兵の十人に相当するから、負けるはずはない。」と豪語した。しかしシンガポールは陥落し、イギリスの軍隊は日本軍に駆逐されることになった。イギリスの軍隊は負けるはずがないと言っていたのではないかとたしなめられると、そのイギリス人は次のように答えた。「いや、日本兵は十一人で来たからだ。」奇妙な理屈だし負け惜しみにも聞こえるが、それなりに筋は通っている。しかし、日英の兵隊の実数を正確に踏まえた上での発言ではなさそうだし、あくまで自分の論理を守り抜こうとしているようにしか思えない。

上の笑い話で、このイギリス人は本当にそのように考えていたわけではない。自分の過ちを素直に認める気はなく、少しでも自分の立場を確保しておきたいのだ。この答えが笑い話にはなっても、なぜ負けたのかの理由にならないことは本人が一番よくわきまえていると思う。彼の理屈自体ナンセンスな理屈以外のなにもものでもない。そのようなナンセンスな答えをなぜするのかがこの笑い話のポイントになる。彼の理屈は間違っていない、相手が十人なら負けなかったが、十一人だから負けたのだ。しかし、イギリスの兵隊一人が日本兵十人に相当すると言う前提には思い入れがあるし、誇張されたものだ。その上、前提の十人は、十一人でも、二十人でもかまわない。そこにこの理屈の矛盾があり、ナンセンス性が生まれてくる。前提にあるのはそもそもイギリス兵が日本兵に負けるはずはないという思いであるからだ。それを承知の上でこの理屈をひねりだすイギリス人は、「十一人で来た」というとき、屁理屈としては論理の筋が通ったとしても、イギリス兵は日本兵に負けたという事実を否定することはできない。つまり自分の負けを踏まえつつも、負け惜しみを言っている。その上で明らかな矛盾に立脚して反論を試みている。表面的には当意即妙な答えをしているように見えるが、それは詭弁に過ぎず、負けたと言う事実を否定のしようがない。しかし、こう言い返すことで、少なくともこの本人はイギリス軍の敗北をのりきって、自分の精神的な立場を死守することができる。

結局、勝ち負けは問題ではなくなっている。負けたことをどのように受け入れるかが課題となる。気持ちだけは前向きでありたいという願いを読みこむことは可能であろう。しかし矛盾を根拠として反論しているのだから、反論そのものがナンセンスなのだ。この反論に対して真正面からその矛盾を突くのは無粋である。誰だって誤りを犯すことはあるわけだが、それをどのように受け止めるかがここで示されている。自分が完全な存在ではなく誤りを犯すこと、そんな自分を肯定して受け入れていること、ナンセンスな反論をしている自分を滑稽に感じている自分が存在することなどがこの反論の背後に隠されている。それは言いかえれば、自分の中に滑稽な部分、

ナンセンスな部分があることを認めた上で、そんな自分を笑うことではないだろうか。この笑いは嘲笑や哄笑でもなければ、自嘲の笑いでもない。人の世の不条理をあるがままに受け止める、慈しむ笑いと言ってもいいだろう。それは、イギリス人がナンセンスな笑いを好むこととも関係するだろう。自分以外のものを笑う際にも、同じような心理が働くから、最良のユーモアには「愛情」が必要だとブリストリーは主張したのではないだろうか。

アメリカ人のユーモアを語った書の中で加島祥造氏はイギリス人のユーモアについても一節をさいて説明している。ケンブリッジ大学で学生のストがあったとき、学生寮の壁に誰かがWilliam Blake ウィリアム・ブレイク (1757-1827) の詩の一句を落書きした。それを見た警官が誰が書いたのかを尋ね、学生はブレイクだと答えたが、警官はブレイクの事を知らなかったので「過激派なのか」と尋ねた。学生はブレイクのファンで、ある意味ブレイクは革命的な詩人であったから「そうだ」と答えた、というものだ。この小話ではブレイクのことを知らなかった警官を笑うのではなく、ブレイクのファンだった学生と警官を対比し、そのズレを示すところにイギリス人独特のユーモアがあると加島氏は指摘している。

フランス流のユーモアだとこの警官の無知や愚鈍さをもっと濃く描くことになる。その方向がフランス的なウイットだ。アメリカのジョークもしばしばそういう嘲笑いを剥きだしにする。アメリカではフランスの軽妙さではなくて、もっとじかに、まともから相手の愚かさを笑う——そういう傾きがある。しかしイギリス的なユーモアというのは、このC君のような立場をとることが多い。そこにイギリスのユーモアの微妙さ、暖かさがある。¹⁹⁾

誰かの愚かしさや失敗を笑いの的にするようなウイットやジョークとは異なったイギリスのユーモアの特徴を加島氏もその暖かさにも求めている。この場合は特に人間が置かれた状況の微妙な温度差を感じ取ることからユーモアは生じている。

ここまででイギリス人のユーモアの一つの傾向は示すことができたと思う。イギリス人の気質や国民性が彼らのユーモア感覚に直結しているからそれらを理解しないことにはそのようなユーモア感覚は理解することが不可能だろう。

アメリカ人の笑いの感覚はイギリス人とは同じではない。アメリカでは子供向けから大人向けまで、毎年様々なジョーク集が出版されている。雑誌でもジョークのコーナーを見かけることは多い。パーティなどのスピーチや会話にジョークの一つや二つは盛り込まなくてはならないことは言うまでもない。ここでいくつかアメリカのジョークを紹介しておく、イギリスのユーモアのもつ味わいが際立つと思う。アメリカ人の笑いの性格をここで網羅してまとめることは私の力量をこえるので、日本人がどのような点に分かりにくさを感じるのかを指摘しつつ、アメリカの典型的なジョークをいくつか紹介しておく。

日本人とアメリカ人の感覚の違いで大きなものの一つは、日本人とくらべてアメリカ人の方が些細なことにもオーバーに反応すること。日本人はその反対で表面的には反応すらしなくみえることは言うまでもないだろう。それはジョークにも当然反映している。

One day a little polar bear cub says to his mother, “Mommy, am I really a polar bear?”

“Why, certainly you are, dear,” she says. “You live on the North Pole and you swim under the ice to catch fish. You do fun things like playing on ice floes and romping through the snow to catch seals. *Of course* you’re a polar bear. Why do you ask?”

“Because,” says the little cub, “I’m fucking *freezing!*”²⁰⁾

これは日本語ではジョークとして理解されないだろう。北極に住んでいる白熊であっても寒い時は寒いだろうと、白熊に感情移入して考えるからだ。なぜこれがアメリカではジョークとして成立するのか。白熊は寒さを感じるはずがない、あるいは感じるべきではないという前提があるからではないだろうか。その白熊が人間のような泣き言を言うところにおかしさがあるといえないことはない。そう思っても、このジョークに大声をたてて笑うのには、くどさを感じてしまう。英語と日本語の発声が違うように、感覚や生理的な部分で埋めようのない違いがあることを意識する必要がある。

人種差別とも考えられるようなジョークはどこ国でも存在する。欧米ではユダヤ人に対する差別が歴史的にも古くから存在してきた。ユダヤ人への差別は今のアメリカであからさまにあるわけではない。しかし今でも昔ながらの帽子ヤムルクをかぶり黒い服を着たユダヤ系アメリカ人はニューヨークの街中を歩いているし、ユダヤ人が過去に差別をうけ、ジョークの的になってきた事実は今でも生きている。むしろユダヤ系の人自身がユダヤ人を的にしたジョークを言うこともある。今でもユダヤ人を的にしたジョークは少なくない。

A man is walking down the street when he sees a man with four arms, and antennae coming out of his head. He goes up to him and says, “You’re not from around here, are you?”

“No,” says the man with the antennae.

“You know,” says the man, “I don’t think you’re an *American*, either. As a matter of fact, I don’t think you even come from this *planet!*”

“Right again,” says the man with the four arms. I’m from Mars.”

“Well,” says the man, “that’s quite some configuration you’ve got there, with those four arms and those antennae and everything.”

“Thank you,” the Martian answers. “We Martians all have them.”

“Well, that’s just amazing,” the man replies. “And, say, what is that big, round, gold plate there in your chest? I’ve never seen that before. Do all Martians have those?”

“Well, no,” says the Martians, “Not the *goyim.*”²¹⁾

パンチラインが最後にある典型的なジョークだ。“goyim”とはユダヤ人から見た異教徒、つまりユダヤ教徒以外の人たちを意味している。そこがこのジョークのポイントであると言えるだろう。手が四本あって、頭にアンテナのついている火星人の胸のところに大きくて丸い金色のプレートがついている。それは火星人ならみんな持っているのかと聞かれて、ユダ教徒以外にはないよと答えている。火星にもユダヤ人はいるのかと野暮なことを言うべきではないだろう。この火星人

がジョークを言っている可能性もある。ユダヤ人は他の人種とはみかけが違っていることが強調されていると考えるべきだろう。

ユダヤ人に関するジョークでも、その違いをつくにせよ、あからさまにユダヤ人であることを攻撃するものは少ない。そこにはユダヤ人差別の長い歴史やアメリカ国内でユダヤ人が占める社会的立場が関係していると予測できる。その点ではジョークとして許容できる範囲が存在しているのかも知れない。

Two bees are flying along. One looks over at the other and notices that he is wearing a yarmulke. "Hey," the first one says, "why are you wearing that?"
"Oh," says the second one, "I don't want anyone to think that I'm a wasp!"²²⁾

二匹のハチが飛んでいるこの情景はこのまま漫画になりそうなコミカルな味わいがある。片方のハチは男性のユダヤ教徒がかぶる円形の帽子ヤムルクをかぶっている。なぜそんな帽子をかぶっているのか聞かれた答えが「ワズプだと思われたくないから」である。ワズプは同音異義語で二つの意味がある。一つはスズメバチ、もう一つはアングロサクソン系白人で宗教はプロテスタントの人。アメリカ社会のエスタブリッシュメントの中で成功するには、ワズプでなくてはならないと言う暗黙の了解がある。アメリカ大統領の中で初めてワズプ以外で大統領になったのはケネディーだった。人種が多元化する中でアメリカ人のワズプに対する意識は変わりつつある。ワズプであることに今でも誇りを持つものもいるだろうが、ワズプの作ってきた価値観に疑問を感じるものも出てきた。このハチのようにワズプではあってもワズプではないと思われたいものも出てくる。このジョークの場合、ユダヤを象徴する帽子はユダヤ人をからかうために使われているわけではない。このジョークを理解するには、ワズプのだけじゃれとアメリカ社会の中で主流を占めてきた者たちの意識の変化を把握しておかなくてはならない。

アメリカ人のジョークの特徴の一つは、新しくやってきた移民をからかうジョークがあることだ。ジョーク的になり、その洗礼を受けることは、アメリカ合衆国の新しい市民として認められる通過儀礼のようにも思える。ポーランドからの移民を笑いの的にしたジョークが八十年代に流行ったことは比較的記憶に新しい。ポーランド人が電球を取りかえるには三人必要だというのがあった。一人は電球をつかみ、一人はその男が立った丸椅子を支え、もう一人が椅子を持った男を回転させるというものだ。このテーマからは多くのヴァリエーションが生まれている。

A Polish man said to me, "You know, you Americans have Polish jokes, but we in Poland tell American jokes. Would you like to heart an American joke from Poland?"
"Sure," I said.
"Okay," said the Pole. "How many Americans does it take to change a light bulb?"
I said, "I'll bite, how many?"
The Polish man said, "One."²³⁾

これは例としてあげたものの逆ヴァージョン。説明すればするほど面白さが減少する、感覚的で瞬発力の強い面白さがある。電球を一人で代えることができるのは当然なのだが、ポーランドではそれは当然のことではないという前提がまずなくてはならない。だからこそ、アメリカ人は電球を一人で交換するなんて変なやつらだとなり、アメリカ人を的にしたジョークになる。最後に「一人で」と答えた時のこのポーランドの人の表情や、頭の中にあることを想像するとまた違った味わいが出てくる。ポーランド人に対してかなりブラックな笑いが成立している。

アメリカ人はポーランド人を対象にしたジョークがことのほか気に入ったようで、さまざまなジョークが作られている。相手を愚ろうするやりかたは徹底していて、ポーランド人が気の毒になるほどである。

Two Polish men rent a rowboat and go fishing in a lake. They are catching a fish after fish, and have almost two dozen [sic] by the end of the afternoon. One man says to the other, "Why don't we come back to the very same place tomorrow?"

"Good idea," his friend answers.

So the first man takes a piece of chalk, and draws an X on the bottom of the boat.

"Don't be stupid!" the friend says. "How do you know that we'll get the same boat tomorrow."²⁴⁾

これは他の国の言葉に翻訳しても伝わりやすいジョークである。話の落とし方は定番とも言えるだろう。落語にも通じる落ちである。話の落とし方が二段階になっていて、二人目の方が一人目よりぼけてみせるところにこのようなジョークの力が生まれる。明日も漁がたくさん釣れるように、乗っている船の床にマークをするのは単純な笑いを引き起こす。それに対して、「そんなばかなことをするな」と言うからには何かまともなことを言うのかと思うと、二人目の男は明日もこの船に乗っているとは限らないと意見する。これでは半分しか理屈が通っていない。明日も同じ船が使えるとすればこの反論は成立しなくなる。船の床にマークをすることをたしなめなくてはならないのだ。

ポーランド人であるからからかいの対象になるのであろうか。これほどまでにジョークの的になるなんて、彼らが一体何をしたと言うのだろう。

Q: Did you hear about the Polish lottery?

A: If you win, you get a dollar a year for a million years.²⁵⁾

これまた言葉が違ってても伝わりやすい。理屈の上では問題ないから、勢いのようなもので聞く者を笑わせるタイプである。このジョークについても主人公がポーランドである必然性は理解できない。

A Polish guy comes home early from work and finds another man in bed with his wife. He

runs over to the dresser and pulls out a gun. He then puts it up to his own head.

When the wife starts laughing, the husband says to her, "Don't laugh, you're next."²⁶⁾

福沢が紹介している笑い話の中に、井戸におろされた男が早く引き上げないとつなを切るぞと脅しているものがあつたが、着想はこのジョークと共通する。前後見境がつかなくなり、慌てている様子も共通している。ここまで紹介したポーランド人のジョークは日本人にも理解可能である。確かにポーランド人にはジョークで説明されているような事件を起こしかねない何かがあるのかも知れないが、それはポーランド人だからと言うことではなさそうである。ユダヤ人の場合にようにユダヤ人の特徴をジョークの手がかりにしているわけではない。笑い話がまず先にあって、たまたまそこに登場する人物としてはポーランド人が選ばれたのだ。だからポーランド人について何の知識がなくても、このようなジョークは国境をこえて理解することが可能となる。福沢が選んだジョークもこのようなものであつた。人種が違つても共通する人間性、愚かしさをテーマとしたジョークはそのまま伝えることができる。

外国人にとって理解するのが難しいジョークは、ものの考え方や感じ方に違いがある場合、文化や歴史を理解していなくてはならない場合などがある。それらのいくつかは先に示した通りであるが、宗教の違いによるものを最後にあげておきたい。

One day the pope gets a phone call from God. God says to him, "Since you have been such a good pope, I wanted you to be the first to know."

"The first to know what?" says the pope.

God says, "I have some good news and some bad news. The good news is that I have decided that from now on, the world will have only one religion."

"That's wonderful!" says the pope. "Now everyone will be peaceful and gets along with one another. That's great! But what's the bad news?"

"In a few days," says God, "you will be receiving a phone call from Salt Lake City."²⁷⁾

「いい知らせと悪い知らせ」タイプはアメリカのジョークの定番となっている。いい知らせの部分で多少持ち上げておいて、悪い知らせで落ちをつける。ここでは教皇に対して天国からイエス・キリストがこのタイプを利用して電話をかけている。いい知らせとは世界中の宗教が一本化されること。悪い知らせとはソルトレークシティから電話がくるということ。これは日本人に限らず、ソルトレークシティの歴史と文化についての知識がなければ理解することはできない。ユタ州の州都のこの街はモルモン教徒によって作られた。モルモン教の日本語での正式名称は末日聖徒イエス・キリスト教会、1830年に設立された。以前は一夫多妻を公認していた宗教でもあり、キリスト教の分派ではあるが、新興宗教的なわかりにくさを保っている。世界の宗教が一本化される以上、カトリックの大本山のローマ教皇はプロテスタントの中でも新興勢力でしかないモルモン教徒と話し合いをしなければならない。現実にはそのような接触は当然あり得そうにない。カトリックのキリスト教国で精神世界の代表者とも言うべき教皇にとって、モルモン教の教主は異

端的存在にすぎない。そんなモルモン教の代表者とローマ教皇が話し合いをしなくてはならない点でこのジョークは成立している。しかし、知識としてこのように説明しても、教皇やモルモン教の持つイメージを体で理解していなければ、このジョークの面白さを感じ取ることは難しい。

アメリカのジョークには切れはある。しかし、人種などの違いの存在を他の国以上に前提としなくてはならないためか、ジョークの質は大味でペースとか深みには欠けている。当然イギリス的な意味でのユーモア感覚も求めることができないと思う。ここで取り上げたジョークの語り手の多くはアメリカの白人である。アフリカ系アメリカ人や中米系のラティノ、東洋系アメリカ人のジョークにはここで取り上げたのとは異なった笑いがあるはずだ。しかしアメリカ合衆国にやってきた世界中からの移民がいわゆるアメリカ人になろうとした時点で、こうしたジョークはアメリカ人にとって一つの共通項として機能してきたのではないだろうか。アメリカのジョークの感覚を身につけ、それを楽しんで言えるようになることは、英語を話せない移民の状態から英語を話す白人中心のアメリカ社会へ踏み込んでいくことを意味してきた。最も、そのようなアメリカ社会への同化を拒絶する者たちが存在し、はなっから英語を話そうとしないラティノの数が増加していることを考えると、アメリカのジョークも含めて、明日の姿がどうなるかはよくわからない部分があることは確かだ。しかし、言葉とナショナリティの問題が硬貨の表と裏の関係である限り、アメリカ国内の文化が多元化するとしても、共通語としての英語の地位はゆるぎはしないだろう。

そもそも人はなぜなぜぞ、ジョークや小話を好むのだろうか。もちろん笑うことができるのは人間だけであるから、笑いたい気持ちを満たすために、ジョークや笑い話などの言葉遊びは使われている。バナナの皮をふんずけて転ぶ人を見たり、パイの投げあいをして顔面をパイだらけにしている人を見た時に、人はおかしさをを感じる。特定のおかしな動作が笑いをもたらすことは少なくないが、人を笑わせるものは圧倒的に言葉だ。言葉の特性の一つとして、人間を笑わせるものという定義を付け加えてもおかしくはない。

なぜ言葉によって人が笑うのか、その理由は幾つか考えられる。その一つとして、言葉が意味のズレを作り、我々の無意識の姿を客観的に示してくれることを指摘できる。下にあげた二つのジョークはそれぞれ対話になっていて、意味のズレにポイントが置かれている。

1) I heard you missed the school yesterday?
Not a bit.

2) The professor rapped on his desk and yelled, "Order!"
Voice from the rear, "Beer!"

これらのジョークでは言葉の多義性を利用し、固定概念にとらわれた考え方の関節をはずそうとしている。一つ目のジョークでは、先生が生徒に「昨日学校を休んだね」と尋ねると、生徒は「全然」と答える。先生は“miss”を「休む」意味で使っているが、生徒は「なくて寂しく思う」

で理解し、学校休んだって全然寂しくなれないという気持ちを伝えている。子どもは普通勉強より遊びの方が好きなものだから、このような本音を聞くと読者はにやりとして納得するのだ。二つ目では大学の教授が講義中学生のうるささに耐えかねて「静粛に」と叫ぶのだが、後ろに座っていた学生が「ビール」と言い返す。このままでこのジョークの面白さを日本語に翻訳することは不可能である。この言葉が「静粛に」と「御注文は」の二つの意味を持つことを利用しているからだ。「ビール」を注文した学生は、まじめくさった教授の言葉を、酒場のボーイの言葉にずらして理解した。学生の機転はなかなかのものであるが、教室の雰囲気や教授のいら立ち、それに対する学生のやんちゃな気分などをイメージできれば、このジョークの切れ味は鋭くなる。これらのジョークでは言葉の意味にズレを生じさせて、そこで新たに生まれるイメージや意味が笑いを引き出す要因となっている。

笑いと遊びが親戚関係にあることは言うまでもない。遊んでいるときに人は最もよく笑うものだし、自由な状態にあるときに笑うものだから。人間を遊びと言う側面から「ホモ・ルーデンス」と名付けた Johan Huizinga ヨハン・ホイジンガー (1872-1945) や Roger Caillois ロジェ・カイヨワ (1913-78) は、人間の文化は遊びの中から生まれてきたと考え、遊びには文化的に積極的な意味があると考えている。カイヨワは遊びの持つ効果の一つとして「めまいの感覚」があることを主張している。²⁶⁾ 手をつないで輪になって速いスピードで回転したり、ブランコに揺られているときに感じるものだ。言葉遊びで感じる感覚もそれに類似している。そもそも人は言葉で思考しているので、頭の中で世界は言葉として存在している。ジョークや笑い話などでは、言葉は人を日常的な思考の枠組みからはずれたところに置き去りにする。そのズレがおかしさを感じさせるから人は笑うのだ。

ジョークや笑い話はイメージを創造することで、言葉とものとの新しい関係を作ってくれる。言いかえるなら言葉が新しい意味を作り出すこともある。言葉遊びの背後にあって、それを豊かなものにしていくものは言葉の創造性に求めることができる。言語学者の池上嘉彦氏は現代の言語観では言葉は思想を表現し伝達する手段以上の何かであることを明らかにし、言葉の力を示すものとして言葉遊びに着目している。

言葉遊びでは、言語は何かあるきまったことを伝達するための記号として関心の対象になるのではなくて、言語というものの中に潜んでいる思いがけぬ意味する力を顕在化してみるという形で、言語そのものが関心の対象になります。²⁹⁾

たかが言葉遊びと軽んじてはいけない。ホイジンガーやカイヨワが指摘してきたように、遊びの中に文化を作り出す力があり、言葉遊びも同様である。特に言葉の場合、言葉を使えるかどうか人間とその他の動物を区別するものであるから、言葉のもつ力こそ人間を人間たらしめているといって過言ではない。そのような言葉の力が純粋な形で発揮されるのが言葉遊びの場合であり、笑い話やジョークの場合も同様である。言葉はものの名前を示す側面もあるが、文章のレベルで

みればわかるように新たな関係を作る力を備えている。だからこそ「光あれと神が言ったときに光が現れた」ように、言葉は新たな存在を造り出す創造力を備えている。そのような言葉の力は、なぞなぞや笑い話などの言葉遊びの中にはっきりと見て取ることができる。異文化を理解する際、その国の言葉独自の力がどのようなものを理解するには、言葉遊びの理解は不可欠である。それに伴って、その背後にある笑いの感覚にも鋭敏でなくてはならない。

注

- 1) Cf. Iona and Peter Opie, *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes* (London: Oxford University Press, 1983), p.326.
- 2) Gary Larson, *The Far Side Gallery* (New York: Andrew and McMeel, 1984), 頁にナンバーは打たれていない。
- 3) *Longman Active Study Dictionary of English* (London: Longman Group, 1983).
- 4) 寺山修司, 『戦後詩：ユリシーズの不在』, ちくま文庫, 1993, p.58.
- 5) 飯沢匡, 『明治の英和对訳ジョーク集：福沢諭吉の開口笑話』, 富山房, 1986.
- 6) 前掲書, p.vi.
- 7) 前掲書, p.3.
- 8) 前掲書, p.94.
- 9) 前掲書, pp.256-7.
- 10) 前掲書, pp.253-4.
- 11) 前掲書, pp.366-7.
- 12) 前掲書, p.176.
- 13) 前掲書, pp.220-1.
- 14) 前掲書, p. viii.
- 15) Iona & Peter Opie, *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*, p.432.
- 16) *Ibid.*, p.193.
- 17) J.B.プリーストリー, 『英国のユーモア』, 秀文インターナショナル, 1978, pp.11-2.
- 18) 松本安弘/松本アイリン, 『英語のこころ：日本語と英語のイメージギャップ』, 丸善ライブラリー, 1993, p.21.
- 19) 加島祥造, 『アメリカン・ユーモアの話』, 講談社, 1986, pp.140-1.
- 20) Jim Pietsh, *The New-York-City Cab Driver's Joke Book*, (New York: Warner Books, 1986), pp.169-70.
- 21) *Ibid.*, pp.113-4.
- 22) *Ibid.*, p.234.
- 23) *Ibid.*, p.102.
- 24) *Ibid.*, p.133.
- 25) *Ibid.*, p.179.
- 26) *Ibid.*, p.134.
- 27) *Ibid.*, p.44.
- 28) ロジェ・カイヨワ, 『遊びと人間』, 講談社文庫, 1973, p.60.
- 29) 池上嘉彦, 『言葉の詩学』, 岩波書店同時代ライブラリー, 1992, p.13.